20 世紀初頭のベトナム語における外来語使用の実態
—ベトナム語による新聞の事例から

The Usage of Loanwords in Vietnamese at the Beginning of the 20th Century : Research on Examples Appearing in a Vietnamese Newspaper

岡田　建志
文化政策学部国際文化学科

Takeshi OKADA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、多くがフランス語に由来する、20 世紀初頭のベトナム語における外来語について、ベトナム語と漢文の併用で発行されていた新聞から収集した事例に基づく調査の結果の一部を示すことを目的としている。フランス語の原語表記のまま用いられていた例として、ベトナム語で書かれた記事中でフランス語の月名（janvier、février 等）が用いられた例が少なくとも 79 件ある。これは現在のベトナム語では全く一般的でない事象である。また、これとは別に、27 の外来語がベトナム語化した綴りと発音で現われている。その一部は現在とは異なる綴り・発音であった。

This paper is aimed at showing a part of the results of research on loanwords, mostly from French, in Vietnamese at the beginning of the 20th century, based on examples collected from a newspaper published bilingually in Vietnamese and classical Chinese. As examples of French words used in Vietnamese with their original form, at least 79 cases were found in which the French names of the months (janvier, février, etc.) were used in articles written in Vietnamese, which is quite uncommon in contemporary Vietnamese. Another 27 loanwords were found in Vietnamised spelling and pronunciation, some of which were spelled and pronounced differently from the contemporary spelling and pronunciation.

1．はじめに

ベトナムは、1862 年にその南部の一部がフランスによって植民地化され、以降北部・中部も含めた全域が漸次フランスの支配下に置かれた。ベトナム民主共和国が独立を宣言するのは 1945 年のことである。植民地期および独立後の時期を通じて、コミュニケーションの手段としてフランス語の使用能力を充分に獲得した人が多数派を占めるという状況はなかったが、ベトナム語の語彙には、フランス語およびフランス語を経由した他の言語を起源とする語が受容されていった。今日でもフランス語起源の語が新語としてベトナム語で使用される場合がある [1)]。こうしたことから見れば、ベトナム語の変容を考察する上で、フランス語から入った語彙が受容され定着していった（場合によってはやがて廃れた）様相の詳細を検討することは、欠くことができないものである。

Vương Toàn が *Từ gốc Pháp trong tiếng Việt* において各種辞典の記載に基づいて示したところによれば、フランス語から借用された語は、1895-1896 年 3 語 [2)]、1931 年 26 語 [3)]、1950 年 164 語 [4)]、1952 年 225 語 [5)]、1988 年 1087 語 [6)]（年次は各辞典の出版年）と増加している。しかし、Vương Toàn 自身、収集した資料に基づいて、1931 年以前の時点で 96 語が出現し、1952 年以前の時点で 417 語が出現していると述べている [7)]。すなわち、当該年次までにベトナム語で使用されるようになっていたフランス語からの外来語のうち、辞典に収録されているのは一部に過ぎない。上記のうち最も早い 1895-1896 年の 3 語という数についても、その時点でベトナム南部の植民地化が開始されてから 30 年以上が経過していることを考慮すると、ベトナム語の語彙中に現れたフランス語からの外来語の数の実態を表したものとは考えにくい。また、Vương Toàn は上記著書においてフランス語からの外来語を複数例その使用年次とともに示しているが、時代を逐って各時点での外来語彙の使用状況を記述してはいない。したがって、特定の時点における特定の外来語の使用状況や外来語彙の全容を把握することは困難である。

そこで、本稿では、1907 年に刊行されていたクオックグー（ローマ字に基づいて形成されたベトナム語表記法）と漢文による新聞『登鼓叢報』[8)] に現われる事例を調査して、フランス語を中心とする他言語から入った外来語について、20 世紀初頭のベトナム語における使用の実態を考察する。ここでは、当時どのような語が実際に用いられていたのかを示し、また、現在のベトナム語との比較により 1907 年当時のベトナム語における外来語の特色の一端を明らかにしたい。現在のベトナム語については、Nguyễn Kim Thản;Hồ Hải Thụy;Nguyễn Đức Dương.*Từ điển tiếng Việt.*Nxb Văn hóa Sài Gòn.2005.（以下 TDTV2005）、Hoàng Phê chủ biên.*Từ điển tiếng Việt.*Nxb Từ điển Bách khoa.2010.（以下 TDTV2010）、Hoàng Phê et al.*Từ điển tiếng Việt.*Nxb Đà Nẵng.2011.（以下 TDTV2011）、Nguyễn Như Ý chủ biên.*Đại từ điển tiếng Việt.* Nxb Đại học Quốc gia Thành phố Hồ Chí Minh.2011.（以下 DTDTV）という 4 種の辞典を参照した。以下、特記しない限り、「現代の辞典」はこの 4 種を一括して指すものとする。

また、『登鼓叢報』では、外来語の音が漢文版において漢字またはチューノム（漢字を基にして形成されたベトナムの文字）で表記されている場合がある。漢越音（漢字のベトナム語音）との音の一致・類似のみに基づいて漢語以外の語を漢字で表記するのは漢字のチューノム的用法と言えるので、『登鼓叢報』におけるこうした事例は植民地期におけるチューノムの用例を示していることになる。漢字・チューノムの使用は植民地期を通じて退潮傾向にあったとは言え、情報伝達の手段としての意義

はまだ失われていなかったので、こうした用例の収集・整理は、植民地期における漢字・チューノムの使用状況を明らかにすることに寄与するであろう[9]。

なお、本稿では、外来語が原語表記のまま使用されている事例およびベトナム語化した表記で使用されている事例について考察するが、原語表記のまま使用されている事例は多数に上るため、本稿ではその一部に限って取り上げたい。

2.『登鼓叢報』について

『登鼓叢報』はベトナムではこの4字の漢越音である *Đăng cổ tùng báo* で知られている。同紙は、週1回、木曜日に発行されていた。題字の記載されたページ(表紙)には記事は無い。題字としては、紙面中央に漢字で「大南同文日報」と記され、その右に同じく漢字で「登鼓叢報」と記されている。一方、記事が掲載されているページについては、クオックグー版で「ĐẠI-NAM（ĐĂNG-CỔ-TÙNG-BÁO)、漢文版で「大南（登鼓叢報)」と記載されている。ĐẠI-NAM は「大南」の漢越音である。『大南同文日報』という名称は、もとは、漢文による官報(1891年8月30日創刊)に付けられたものであった。その後、その官報としての機能は『南越官報』(1907年1月6日創刊）に継承された。一方、背景は未詳であるものの、『大南同文日報』の名称は、上述した『大南同文日報』『登鼓叢報』を併記した新聞が使用することとなり、同紙は官報の性格を持たないものとなった[10]。同紙をめぐってはこのような事情があるが、本稿では名称として『登鼓叢報』と *Đăng cổ tùng báo* を用いることとする。『登鼓叢報』としての最初の号は1907年3月28日発行の793号とされ、この号数はそれ以前の『大南同文日報』との通号であるとされているが、上述の『南越官報』創刊の1907年1月6日から同年3月28日までの間の事情は未詳である。ベトナム北部においては、『登鼓叢報』や1905年創刊の『大越新報』がクオックグーによる新聞の最初期のものである[11]。

『登鼓叢報』は、表紙および告知・広告のページを除くと、クオックグー版と漢文版が1ページずつ交互に印刷されており、1号当たり16ページ構成を基本とした。ページ番号は793号から各号に亘って通号で付けられている。今回利用することのできた分は、793号から826号（1907年11月14日）までであり、付録のクオックグーページやクオックグー・漢文混用の告知・広告のページを含めてクオックグーによる紙面が222ページある[12]。クオックグーの表記は基本的に音節ごとにスペースを入れる方式[13]であるので、見出しや表等を含まない部分の例として793号の2ページ目の右側のコラムの文章中の音節数を数えると、429音節ある（算用数字による西暦の年号表記1ヶ所は1音節と数えた)。

上述のように『登鼓叢報』は一部のページを除いてクオックグー版と漢文版のページが交互に収められている。両版の関係については、相互に訳し合ったものではなく、それぞれの版として読んでほしい旨、発刊当初の紙面で告知されている[14]。実際に両版を比較すると、その告知のとおりに、一方の版でのみ掲載されている内容があったり、同一の件を取り上げている記事が双方に掲載されていても記述に精粗の差があったりする。しかし、同一の件についての記事が両版にあれば、クオックグー版で用いられている外来語が漢文版でどのように表されているかを知ることができるため、当時の外来語の受容の状況を総体的に考察するためには、そうした記事が重要な情報源である。

3. 原語表記のまま使用されている事例—日付の表記

『登鼓叢報』において外来語が原語の綴りのまま表記されて用いられている事例は多数に上るが、ここでは、その中で一群を成す日付の表記に見られる事例を取り上げる。

まず、月名については、1月から12月までの各月について順にそれぞれ下記の事例数が確認される[15]。

janvier（1例）[16]
février（1例）[17]
mars（12例）[18]
avril（14例）[19]
mai（13例）[20]
juin（6例）[21]
juillet（3例）[22]
août（6例）[23]
septembre（17例）[24]
octobre（3例）[25]
novembre（2例）[26]
décembre（1例）[27]
総計79例

当然のことながら、以上の月名は西暦（陽暦）で日付を記す際に用いられている。ただし、西暦表示の月名が常にフランス語によって示されるわけではなく、「tháng ba tây」[28]のようにベトナム語で示されている場合もある。

また、日の表記については、「1日（ついたち）」のみ、フランス語の「1er」をそのままベトナム語文中で用いているものが6例確認できる[29]。ただし、「1日（ついたち）」を示すのに常に「1er」を用いていたわけではなく、ベトナム語の「ngày mồng một」を用いている場合もある[30]。「1日（ついたち）」以外の日付は算用数字かベトナム語の綴りで示されていて、「1er」のように明確にフランス語を用いていると見なせる例は確認できない。

以上が日付の表記の月・日の部分においてフランス語を原語のまま用いている事例である。このように、1907年当時においてはベトナム語の文章中でフランス語をそのまま用いて月・日を表すという方法が行われていた。一般に今日のベトナム語では日付の表記にフランス語を用いるという方法は見られない。そうしたことから見ると、上記のように日付を記すためにフランス語を原語のまま文章中に用いる場合があるというのは、20世紀初頭のベトナム語の文章の特徴の一端を成すものと言える。ただし、それらが口頭でも用いられていたか否かは、今回検討した事例からは確認できない。

なお、ベトナム語の文章中のものではないので上記の事例の数には含めなかったが、表紙では、発行の日付がフランス語と漢文で示されている。例えば、798 号では、フランス語で、

Jeudi, 2 mai 1907

漢文で、

成泰十九年三月二十日

のように示されている。すなわち、フランス語では曜日（この場合は jeudi= 木曜日）と西暦の年月日が記され、漢文で年号（この場合は「成泰」）を用いて陰暦によるベトナム暦の年月日が記されている。ただし、題字のページ以外の本文中では、曜日の表記は基本的にベトナム語によるもの（chủ nhật＝日曜日、等）が用いられている。[31)]

4．ベトナム語化した形で表記されている外来語

フランス語等の原語の綴りではなくベトナム語化してクオックグーにより表記されている外来語と考えられる語として、下記の 27 語が確認される。このうち、/ で区切って併記したのは、原語が同一でありつつクオックグーでの綴りが複数あるものであり、1 語として数えている。掲載はクオックグーのアルファベット順である。

an-pha-bê
ba-ton / ba-toong
bồi
cà-phê
cà-vạt
cao-su / cao-xu
cát-tút
cẩm / cẩm-mi-se / cẩm-mi-xe
cu-li
đầm
đít cua / đít-cua
đốc-tờ / đốc_tờ
la ga / la-ga
mạch-lô
mề-đay / mền-đay
phu-lít / phú-lít / phút-lít
sà-cột
sà-ích
sà-phòng
săng
sen-đầm / xen-đầm
sếp / xếp
su
tem
va-lít
vang
xen-lin

以下にこれらの事例の詳細を述べる。なお、事例数について、告知・広告のように同一のものが複数回掲載されている場合には一括して 1 件としてある。

- an-pha-bê

原語はフランス語の alphabet である。ただし、これは「例えば alphabet をクオックグーに移して an-pha-bê とする。」という文 [32)] に出てくる事例であり、an-pha-bê という語の使用が定着していたか否かは未詳である。なお、この an-pha-bê は現代の辞典にも「アルファベット」を意味する語として収録されているが、古い用法とされている場合がある。[33)]

- ba-ton / ba-toong

フランス語の bâton（杖）から来たものと考えられる。ba-ton と表記された例は、西洋式の服装の男性を描写する文中にある「tay thì ba-ton（手には ba-ton）」[34)] である。一方、ba-toong と表記された例は、服飾品を扱う Nhà hàng ông A Dubois という商店の広告中にある [35)]。これらを総合すると、ba-ton / ba-toong は bâton がベトナム語化して用いられていたものと考えられる。「杖」一般を表す語としてはベトナム語本来の「gậy」があるが、上記の事例の文脈から見ると、西洋風のものを特に ba-ton / ba-toong と呼んだものと推測される。音節末子音 n（/n/）の前の o と音節末子音 ng（/ŋ/）の前の oo は綴り字の規則上同音を示すので、ba-ton と ba-toong の相違は音節末子音のみである。なお、現代の辞典には後者の語形のみが収録されている。

- bồi

現代の辞典ではフランス語の boy（植民地における若い男性使用人）に由来するとされている語である。『登鼓叢報』では原語は併記されていないが、4 例が確認され、うち 3 例はハノイのニュースの文中で使用されており [36)]、1 例は「パリでカフェの給仕がストライキをした」というニュースの文中に現れる [37)]。対応する漢文版では、漢越音で bồi と読む「陪」または「培」の字を含む「陪人」「陪子」「培役」「陪夫」という 4 種の表記が当てられている。

- cà-phê

原語はフランス語の café である。cà-phê の表記で 3 例が確認される [38)] 他、café の表記も 1 例ある [39)]。この語は今日も cà phê 乃至 cà-phê としてベトナム語辞典に収録されているものであり、20 世紀初頭の段階で既に今日と同じ形でベトナム語文中で用いられていたことが判明する。

- cà-vạt

原語はフランス語の cravate（ネクタイ）である。上述の Nhà hàng ông A Dubois の広告中にあり、その漢文版では「歌勿頸飾」の語が対応している。「歌勿」の漢越音は ca vật であるが、ここでは cà-vạt を表記するチューノムとして用いられていると考えられる。意味を示す「頸飾」をそれに添えて「歌勿頸飾」と表記し

たものであろう。cravate に由来する語は今日 ca vát や cà vạt 等複数の語形があり、そのうちの cà vạt が『登鼓叢報』に出現していたことが判明する。

- cao-su / cao-xu

原語はフランス語の caoutchouc（ゴム）である。cao-su が 5 例 [40]、cao-xu が 2 例 [41] ある。原語が併記されている例はないが、広告の事例 2 件については漢文版でそれぞれ「樹膏」「樹膝」が対応しており、「膝」を「漆」の誤植と考えれば、これらは「ゴム」を指すものと見なせるため、caoutchouc が cao-su / cao-xu という形となって用いられていたと言える。この語は現在でも用いられており、今日の正書法では cao su と表記される。なお、今日のハノイ方言の発音では綴り字上の s と x はいずれも /s/ である。

- cát-tút

現代の辞典には見出しとして掲載されていない語である。『登鼓叢報』では 1 例が確認される [42]。原語は併記されていないが、下記の用例から見て、フランス語の cartouche（薬筒、実包）に由来するものと考えられる。当例はモロッコ情勢のニュースの文中で Raisouli が Sir MacLéan 解放の交換条件として要求した項目の中に「1 万丁の銃、100 万の cát-tút、大砲 6 門、…」と出てくるものである。漢文版の該当部分では「吉卒弾兆顆」（「兆」は「百万」の意）とある。「吉卒」は、この 2 字の漢越音 cát tốt を借りて cát-tút を表記したものであろう。

- cẩm / cẩm-mi-se / cẩm-mi-xe

cẩm が 7 例 [43]（うち 1 例は cẩm-chính という形で記されている）、cẩm-mi-se[44]、cẩm-mi-xe[45] が各々 1 例ある。cẩm-mi-se および cẩm-mi-xe はフランス語の commissaire（ここでは commissaire de police＝警視の意）に由来すると考えられ、cẩm はそれを省略したものである。現代の辞典では cẩm という語形のみが収録されているが、1907 年の時点では省略されない cẩm-mi-se、cẩm-mi-xe という形でも用いられていたことが判明する。

一方で、上述のように、cẩm が「政」の漢越音 chính と結合して cẩm-chính という語を形成するという事例が見られる [46]。この例では、cẩm-chính は官庁を示す sở という語と結びついて sở cẩm-chính（警察署の意）という形で出ている。また、cẩm 単独でも sở の後に付いて sở cẩm（同じく警察署の意）という形で用いられる場合がある [47]。漢文版と照合すると sở cẩm には「監城所」「警察座」という語が当てられている場合があり、また、上述の sở cẩm-chính には「錦眉車所」が対応している。さらには上述の cẩm-mi-xe に対しても「錦眉車」が当てられている。「錦眉車」の漢越音は cẩm mi xa であるが、xa はチューノムとして xe とも読むので、cẩm-mi-xe 乃至 cẩm-mi-se に対して「錦眉車」の字が当てられていたと考えることができる。

- cu-li

いわゆる「苦力（クーリー）（coolie）」であり、5 例が確認される [48]。現代の辞典では、軽蔑の意を含む語であるとされている。

- đầm

bà-đầm として 2 例が確認される [49]。bà はここでは「女性」を意味するベトナム語であり、đầm は現代の辞典ではフランス語の dame（女性）から来た語で「西洋の女性」を意味するものとされている。

- đít-cua / đít cua

đít-cua は、タインホアで「学会」（教育・啓蒙活動の組織）が創設されたがこれといった実績が見られないというニュースの中で「今日も đít-cua、明日も đít-cua」[50] と揶揄する部分に出てくる。これから見て、原語はフランス語の discours（演説）であると考えられる。ハイフンのない đít cua という例も見られる [51]。

- đốc-tờ / đốc_tờ

原語はフランス語の docteur であり、「医師」の意で用いられている。アンダーバーを用いて đốc_tờ としてあるのは 1 例のみであり、đốc-tờ の誤植であろう。“THẦY-THUỐC AN-NAM”（安南の医者）という記事 [52] で 6 ヶ所に用いられており、他に 2 例が確認できる [53]。また、原語の docteur のまま用いられているものが 3 例 [54]、原語の省略形 Dr を敬称として用いているものが 3 例 [55] 確認される。なお、今日では đốc-tờ は古い語乃至口語とされている [56]。

- la ga / la-ga

フランス語の gare（駅）に女性単数の定冠詞 la が付いた la gare から来ている。今日のベトナム語では一般に ga のみで「駅」を意味する語として用いられる [57] が、『登鼓叢報』においては la ga / la-ga として用いられている [58]。原語の la gare のまま文中に用いられる例もあり、それらの中には漢文版で「羅歌」や「羅哥」が当てられている場合がある。「羅歌」「羅哥」とも漢越音は la ca であり、la ga を表記するチューノムとして用いられているものと言える。

- mạch-lô

1 例が確認される [59]。原語は併記されていないが、「兵士」を意味する lính という語の後に付く lính mạch-lô という形で出ており、後続の文中でそれが lính thủy（水兵の意）と言い換えられている [60] ことから、mạch-lô はフランス語の matelot（水兵）に由来するものと考えられる。漢文版では lính mạch-lô に対して「白奴兵」という字が当てられている。「兵」は lính に対応するものである。「白奴」の漢越音は bạch nô であるが、ここでは類似音である mạch-lô を表記するチューノムとして用いられていると見なすことができる。

- mề-đay / mền-đay

mề-đay が 1 例 [61]、mền-đay[62] が 2 例確認される。mền-đay に対しては漢文版で「佩星」の語が当てられ

ており、これはフランス語の médaille（勲章）に当たる。現代の辞典のうちでは DTDTV のみが médaille に由来する語として mề-đay と mền-đay 両様の語形を挙げている。『登鼓叢報』の事例から、1907 年の時点でこの 2 つがともに用いられていたことが判明する。両者の相違は音節末子音 n（/n/）の有無のみである。なお、この他に、『登鼓叢報』では原語の綴りのまま médailles という複数形が用いられている例が 1 件確認される [63]。

- phu-lít / phú-lít / phút-lít

police から来たと考えられる語であり、phu-lít が 3 例 [64]、phú-lít が 18 例 [65]、phút-lít[66] が 5 例確認される。phu-lít と phú-lít の相違は第 1 音節の声調、phú-lít と phút-lít の相違は第 1 音節の音節末子音 t の有無である。この 3 つの語形のうち現代の辞典に掲載されているのは phu-lít のみである。漢文版と照合すると、sở phu-lít に対して「警察所」[67]、lính phú lít に対して「監城兵」[68] という語が当てられている事例がある他、lính phú lít に対して「富劣兵」なる字が当てられている場合もある [69]。「警察」「監城」は police を意訳したものであろうが、「富劣」は、この 2 字の漢越音が phú liệt であることから、これをチューノムとして用いて、類似した発音の phú lít を表記したものと考えられる。

- sà-cột

NHÀ HÀNG ÔNG A DUBOIS の広告で用いられている語であり、漢文版では「車骨皮囊」という語が対応している [70]。「車骨」は、その漢越音 xa cốt との類似に基づいて sà-cột を表すチューノムとして用いられているものと考えられ、それが意味を表す「皮囊」と併記されて全体として sà-cột に当たる表現として用いられているものと言える。服飾品を扱う商店の広告に用いられていることも考慮すると、これはフランス語の sacoche（肩掛けかばん）から来たものと考えられる。なお、現代の辞典では sacoche から来た語として xà cột 乃至 xắc cốt という語形が掲載されている。

- sà-ích

1 例が確認され、そこでは saïs という原語が併記されている [71]。英語では、ヒンドゥスターニー語から入ったとされる syce（「馬丁」の意）に saïs という綴りもある [72]。現代の辞典には「馬車を操作する人（người điều khiển xe ngựa）」[73] といった意で xà ích という語が収録されているが、語源は示されていない。本稿では、この語がベトナム語に入った経緯は未詳とせざるを得ないが、現代の辞典に記載されている xà ích と同源と推測される語が 20 世紀初頭に登場していたことは確認できる。

- sà-phòng

HIỆU ÔNG LACHAL の広告 [74] に用いられている語であり、漢文版では「肥皂」が当てられている [75]。これは中国語では石鹸を意味する語である。このことから、sà-phòng はフランス語の savon（石鹸）から来たものと言える。なお、今日のベトナム語で「石鹸」を意味する語の標準的な表記は xà phòng である。

- săng

『登鼓叢報』の事例では essence de térébenthine（テレビン油）と併記された dầu Săng để pha sơn（塗料を溶かす săng 油）の一部として用いられている [76]。săng は essence の発音を写したものの省略形と考えられる。なお、現在のハノイの発音で săng と同音である xăng は今日「ガソリン」の意で用いられている（フランス語の essence にも「ガソリン」の意がある）。

- sen-đầm / xen-đầm

sen-đầm が 1 例 [77]、xen-đầm が 4 例 [78] ある。『登鼓叢報』には原語の併記はないが、現代の辞典でフランス語の gendarme（憲兵）から来たとされている語である。漢文版と照合すると、xen-đầm に「警察兵」「巡警兵」が対応している例がある他、クオックグー版で sở sen-đầm とあるのに対して「仙潭所」なる表現が用いられている例がある。「所」は sở に対応するので、sen-đầm には「仙潭」が対応していると見なせる。「仙潭」の漢越音は tiên đàm であり、tiên と sen とはやや遠いが、ここでは「仙潭」をチューノムとして用いて sen-đầm を表記したものと言えるだろう。

- sếp / xếp

フランス語の chef に由来すると考えられる。sếp が 1 例、xếp が 18 例あり、lính-xếp[79]（警官）という形で出ている 1 例以外は、いずれも「隊」の漢越音 đội と結合した đội-sếp[80] / đội-xếp[81]（警察）という語の中で用いられている。sếp は現代の辞典では「指揮を取る人」の意で収録されている。

- su

『登鼓叢報』の価格を示す mười su（10 スー）の表示で題字のページに毎号用いられている他、記事や広告でも貨幣単位を表す語として頻出している。フランス語の sou から来たとされる語である。

- tem

1 例が確認される [82]。漢文版では「粘子」の語が当てられている。フランス語の timbre（切手）に由来する語であり、『登鼓叢報』では原語のままの timbre[83] やその複数形の timbres[84]、および timbre-poste[85]（郵便切手）が用いられている事例もある。これらには漢文版ではそれぞれ「票子」「電票」「電票」の語が当てられている。なお、今日のベトナム語では、ここに現われている漢語の漢越音ではなく tem が切手を表す語として一般に用いられている。

- va-lít

6 例が確認される [86]。うち 1 例は NHÀ HÀNG ÔNG A DUBOIS の広告に用いられている。その漢文版では「巴離皮笈」が va-lít に対応している。「巴離」

の漢越音は ba li であり、ここでは va-lít に対応していると考えられる（ただし、発音の上からは、「巴離」は後述する va li という語形を表記するものと考えるほうがふさわしいとも言える）。「巴離皮笈」は、va-lít の音に対応する「巴離」と意味に対応する「皮笈」を併記して示したものと考えられる。このことから va-lít はフランス語の valise（旅行かばん）から来たものと言える。なお、現代の辞典のうち va-lít を掲げるのは DTDTV のみであり、valise に由来する語として 4 種に共通して掲げられているのは va li である。この va li と va-lít のうち、少なくとも後者は 1907 年の時点で用いられていたことが判明する。

- vang

『登鼓叢報』では原語の併記はないが、今日フランス語の vin（ワイン）に由来するとされている語であり、3 例が確認される [87]。この 3 例は、いずれも riệu vang の形で現われる。riệu は「酒」の意で、今日の標準的な綴りでは rượu と書かれるものであり、riệu vang (rượu vang) で「ワイン」の意である。3 例中 1 例は HIỆU ÔNG LACHAL の広告に登場するものであり、その漢文版では「紅酒」と記されている。

- xen-lin

1 例が確認され、フランス語の cellule という語が併記されている。牢獄に関する記事で「xen-lin(cellule) の罰を課す（bắt phạt xen-lin(cellule)）」[88] という表現で出てくるものであり、「独房」を意味する語として用いられていると考えられる。「独房」を意味する語で cellule に由来するものとして現代の辞典に掲載されているのは xà lim 乃至 xà linh という語形であり、xen-lin は掲載されていない。xà lim / xà linh と xen-lin を比較すると、原音の /e/ 乃至 /ɛ/ に xen の e（/ɛ/）が対応している点において xen-lin のほうが原音に近いと言える。また、原音の音節末の /l/ に lin の n（/n/）が対応している点は、ベトナム語における他の外来語においても一般的に観察されることである。このような特徴を持つ xen-lin という語形が 1907 年の時点で用いられていたことが判明する。

以上が、ベトナム語化した表記で『登鼓叢報』に用いられている外来語 27 語の詳細である。この 1907 年の 27 語の事例のみで 20 世紀初頭のベトナム語における外来語全般の特色について結論を出すことはできないが、これらの事例そのものについては、

① 同一の原語に由来しつつ発音の異なる複数の語形が出現している場合がある（事例：ba-ton/ba-toong、mề-đay/mền-đay、phu-lít/phú-lít/phút-lít）。
② 現代において一般に見られる発音とは異なる発音で用いられているものがある（事例：xen-lin）。
③ ベトナム語化した表記と原語による表記が併存している場合がある（事例：cà-phê と café、đốc-tờ と docteur、la ga/la-ga と la gare、mề-đay/mền-đay と médaille/médailles、tem と timbre/timbres）。
④ ベトナム語化したものが更に省略された形で用いられている場合がある（事例：cẩm、săng）。
⑤ フランスによる支配下で敷かれた制度や植民地期に入ってもたらされたと考えられる物品に関するものとしてこれらの語彙が用いられている。

といった点が指摘できる。

5．おわりに

以上により、20 世紀初頭のベトナム語における外来語使用の実態の一部を明らかにすることができた。そこでは、月名を初めとしてフランス語が原語表記のまま用いられている例もあれば、ベトナム語化した表記で用いられている例もある。後者はすなわちそれらがベトナム語化した発音で用いられていたことをも示していると言える。

本稿では、原語表記のまま用いられている例については一部を取り上げたのみであり、すべてを検討することはできなかった。また、漢文版において漢字をチューノムとして用いて外来語の音を写した事例は取り上げたが、外来語を意訳した事例については少数に触れるにとどまった。ベトナム語における外来語の受容や植民地期における語彙の変遷の全貌に迫るためには、こうした点をさらに解明していくことが必要であろう。今後検討を重ねたい。

注

1) 1985 ～ 2000 年の時期の新語を約 2500 項目収載したというベトナムの言語学研究所編のベトナム語新語辞典（Viện Ngôn Ngữ học, *Từ điển từ mới tiếng Việt*, Nxb TP. Hồ Chí Minh, 2002.）にはフランス語に由来するものが 36 語見出される。
2) Huình-Tịnh Paulus Của, *Đại-Nam quấc-âm tự vị*.
3) Hội khai trí tiến đức, *Việt-Nam tự-điển*.
4) Đào Văn Tập, *Tự-điển Việt-Nam*.
5) Thanh Nghị, *Việt-Nam tân từ-điển*.
6) Hoàng Phê chủ biên, *Từ điển tiếng Việt*.
7) 注 1 ～ 4 の辞典の調査結果も含め、Vương Toàn, *Từ gốc Pháp trong tiếng Việt*, Nxb Khoa học xã hội, 1992, p.38.
8) 本稿を執筆するに当たり、岩月純一氏の御厚意により、この史料の写しを閲覧することができた。記して感謝する。原本はベトナムの史学院所蔵のものである。
9) チューノムについては、Nguyễn Quang Hồng chủ biên, *Tự điển chữ Nôm*, Nxb Giáo dục, 2006 を参照した。
10) 『大南同文日報』『南越官報』『登鼓叢報』相互の関係については、Cao Tự Thanh, “Sự chuyển tiếp từ *Đại Nam Đồng văn nhật báo* qua *Nam Việt quan báo* & *Đại Nam Đăng cổ tùng báo*”, *Tạp chí Xưa & Nay* 403, 2012, pp.24-27.
11) Huỳnh Văn Tòng, *Lịch sử báo chí Việt Nam: Từ khởi thủy đến năm 1945*, Đại học Mở-Bán công Thành phố Hồ Chí Minh, 1994, pp.32-33.
12) ただし、汚損や破損、欠落があるため、222 ページ分の文章をすべて閲覧できたわけではない。
13) ただし、『登鼓叢報』の紙面では、フランス領期の他の文献と同様に、1 語が複数の音節からなる場合には各音節をハイフンで繋いでいる例も多い。
14) 『登鼓叢報』793 号 2 ページ “NHỜI GIAO HẸN”。以下、出典の注記において、『登鼓叢報』については、原則として『登鼓叢報』を省略し、号数および必要に応じてページのみ示し、行論上必要な場合に限って記事の題名を併記する。また、紙面の汚損・欠落等により推測で号数を示したものについては「?」を付す。
15) 文中に現われる例としては、“Hạn đến 30 avril thì thôi nhận bài thi, ...”（793 号 16 ページ “Thi vẽ”）など。
16) 811 号？の supplément
17) 811 号？の supplément
18) 793 号に 6 例、794 号に 1 例、795 号？に 2 例、804 号？に 1 例、811 号？の supplément に 2 例。
19) 793 号に 2 例、794 号に 2 例、795 号？に 1 例、796 号に 3 例、

797 号に 3 例、798 号に 1 例、801 号？に 1 例、802 号に 1 例。
20) 797 号に 4 例、799 号に 1 例、801 号？に 2 例、802 号？に 4 例、809 号？に 1 例、820 号に 1 例。
21) 795 号？に 1 例、803 号に 1 例、806 号に 1 例、811 号？に 2 例（うち 1 例は supplément に記載）、815 号に 1 例。
22) 793 号に 1 例、802 号に 1 例、803 号に 1 例。
23) 811 号？に 2 例、812 号に 1 例、814 号に 1 例、815 号に 1 例、816 号に 1 例。
24) 815 号に 1 例、816 号に 2 例、817 号に 6 例、818 号に 7 例、820 号に 1 例。
25) 816 号に 1 例、825 号？に 2 例。
26) 822 号に 1 例、823 号に 1 例。
27) 811 号？の supplément に 1 例
28) 796 号 60 ページ “Việc vặt các tỉnh” に現われる例。tháng ba は「3 月」、tây はここでは「西洋」乃至特に「フランス」を表す語で、tháng ba tây 全体で「西洋（フランス）の 3 月」すなわち「（陽暦による）西暦の 3 月」を意味する。
29) 797 号 74・76 ページ、802 号 154 ページ（2 例）、803 号 174 ページ、811 号？の supplément の 9 ページ。
30) 824 号 500 ページ “CÁC CẦU HỎI TÒA DÂN-HỘI-NGHỊ-VIỆN”。
31) 例として 821 号 462 ページ “VIỆC VẶT CÁC TỈNH” における “Hôm chủ nhật là ngày 22 tháng trước”（「先月 22 日日曜日」の意）。
32) 821 号 45 ページ “HỌC MỚI”。
33) TDTV2005。
34) 813 号 324 ページ “NHỜI ĐÀN BÀ”。
35) 824 号 510 ページ。
36) 801 号？ 136 ページ、806 号 218 ページ、823 号 496 ページ。
37) 797 号 74 ページ。
38) 795 号？ 46 ページ、797 号の 74 ページ、806 号 220 ページ。
39) 818 号 402 ページ。
40) 795 号 ?48 ページ掲載 HIỆU ÔNG LACHAL の広告、806 号 214 ページ、824 号 510 ページ掲載 NHÀ HÀNG ÔNG A DUBOIS の広告、825 号？ 524 ページ、826 号？ 540 ページ。
41) 804? 号 184 ページ、813 号 324 ページ。
42) 820 号 440 ページ “ĐIỆN BÁO HOÀN CẦU”。
43) 797 号 74 ページ、801 号 ?140 ページ、802 号 150 ページ、809 号？ 434 ページ、812 号 312 ページ、815 号 360 ページ、824 号 498 ページ。
44) 798 号 94 ページ。
45) 809? 号 270 ページ。
46) 注 43 に挙げた 802 号 150 ページの事例。
47) 注 43 に挙げた 801 号 ?140 ページ、812 号 312 ページ、815 号 360 ページの事例。
48) 794 号 20 ページ、806 号 218 ページ（2 例）、810 号 274 ページ、818 号 412 ページ。
49) 798 号 94 ページ、816 号 380 ページ。
50) 817 号 398 ページ。
51) 819 号 430 ページ。
52) 816 号 370 ページ。
53) 821 号 462 ページ、823 号 496 ページ。
54) 802 号 154 ページ、812 号 312 ページ、822 号 470 ページ。
55) 802 号 158 ページ、822 号 470・472 ページ。
56) TDTV2011。
57) DTDTV には la-ga という語形も収録されている。ただし、語釈は “Nh. Ga”（Ga に同じ）とあるのみである。
58) 804 号？ 184 ページに la-ga（1 例）、820 号 436 ページに la ga（“THẦY KÝ LA GA” 記事中に 6 例）。
59) 794 号 30 ページ “Việc vặt các tỉnh: Saigon”
60) “Hôm 27 tháng ba ở Cầu-ông-lãnh có tên lính mạch-lô tây Romani bắn bằng súng lục chết một người và bị thương nặng một người lính khác. ... Chính chỗ lính thủy giết nhau, ...”
61) 797 号 66 ページ。
62) 798 号 94 ページ、806 号 222 ページ。
63) 804? 号 186 ページ。
64) 794 号 20 ページ、806 号 218 ページ、825 号？ 524 ページ。
65) 796 号 58 ページ、797 号 68 ページ・78 ページ（2 例）、801 号？ 140・142 ページ、803 号 174 ページ、804 号 ?188 ページ、806 号 220 ページ（2 例）、809 号 ?270 ページ（3 例）、818 号 412 ページ、826 号 ?542 ページ（4 例）。
66) 793 号 6・12 ページ、794 号 20 ページ（2 例）、821 号 460 ページ。
67) 825 号 ?527 ページ。
68) 801 号 ?143 ページ。
69) 803 号 175 ページ。
70) 824 号 510・511 ページ。
71) 799 号 102 ページ。
72) J.A. Simpson and E.S.C. Weiner, *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., vol.XVII, Oxford:Clarendon Press, 1989, p.441.
73) TDTV2011 の語釈。
74) 795 号 ?48 ページ。
75) 798 号 96 ページ。
76) 820 号 444 ページ。
77) 825 号 ?524 ページ。
78) 796 号 58 ページ（4 例）。
79) 814 号 348 ページ。
80) 798 号 82 ページ。
81) 793 号 6 ページ、797 号 74 ページ、799 号（ページ番号不明）、801 号 ?136 ページ、809 号 266 ページ（2 例）・270 ページ（2 例）、811 号 ?298 ページ、814 号 348 ページ（3 例）、815 号 360 ページ（2 例）・362 ページ。
82) 809 号 ?270 ページ。
83) 793 号 14 ページ。
84) 819 号 422 ページ。
85) 816 号 380 ページ。
86) 804 号 ?184 ページ（5 例）、824 号 510 ページ。
87) 795 号 ?48 ページ、812 号 314 ページ、818 号 404 ページ。
88) 825 号？ 526 ページ “Thói-tục đề-lao”。

史料

『登鼓叢報』*Đăng cổ tùng báo*
号数（発行月日）※発行年はすべて 1907 年。
793 号（3 月 28 日）
794 号（4 月 4 日）
795 号（4 月 11 日）
796 号（4 月 18 日）
797 号（4 月 25 日）
798 号（5 月 2 日）
799 号（5 月 9 日）
801 号（5 月 23 日）
802 号（5 月 30 日）
803 号（6 月 6 日）
804 号（6 月 13 日）
806 号（6 月 27 日）
809 号（7 月 18 日）
810 号（7 月 25 日）
811 号（8 月 1 日）
812 号（8 月 8 日）
813 号（8 月 15 日）
814 号（8 月 22 日）
815 号（8 月 29 日）
816 号（9 月 5 日）
817 号（9 月 12 日）
818 号（9 月 19 日）
819 号（9 月 26 日）
820 号（10 月 3 日）
821 号（10 月 10 日）
822 号（10 月 17 日）
823 号（10 月 24 日）
824 号（10 月 31 日）
825 号（11 月 7 日）
826 号（11 月 14 日）

参考文献

Cao Tự Thanh. “Sự chuyển tiếp từ *Đại Nam Đồng văn nhật báo* qua *Nam Việt quan báo* & *Đại Nam Đăng cổ tùng báo*.” *Tạp chí Xưa & Nay*. 403(2012). pp.24-27.

Đoàn Thiện Thuật. *Ngữ âm tiếng Việt*. Nxb Đại học và Trung học Chuyên nghiệp. 1977.

Hoàng Phê chủ biên, *Từ điển tiếng Việt*. Nxb Từ điển Bách khoa. 2010.

Hoàng Phê et al. *Từ điển tiếng Việt*. Nxb Đà Nẵng. 2011.

Huỳnh Văn Tòng. *Lịch sử báo chí Việt Nam: Từ khởi thủy đến năm 1945*. Đại học Mở-Bán công Thành phố Hồ Chí Minh. 1994.

Nguyễn Kim Thản;Hồ Hải Thụy;Nguyễn Đức Dương. *Từ điển tiếng Việt*. Nxb Văn hóa Sài Gòn. 2005.

Nguyễn Như Ý chủ biên. *Đại từ điển tiếng Việt*. Nxb Đại học Quốc gia Thành phố Hồ Chí Minh. 2011.

Nguyễn Quang Hồng chủ biên. *Tự điển chữ Nôm*. Nxb Giáo dục. 2006.

Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. vol. XVII. Oxford:Clarendon Press. 1989.

Viện Ngôn Ngữ học. *Từ điển từ mới tiếng Việt*. Nxb TP. Hồ Chí Minh. 2002.
Vương Toàn. *Từ gốc Pháp trong tiếng Việt*. Nxb Khoa học xã hội. 1992.